



公益社団法人  
シャンティ国際ボランティア会  
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

# 東北に、よりそって。

東日本大震災 被災者支援活動 シャンティの取り組み



# 大震災から3年―― 復興の歩みとともに

大震災から3年が経過しました。瓦礫を運び出すダンプカーで交通渋滞になる被災地がある一方、東京電力福島第一原子力発電所の事故後に人々の立ち入りが制限され、2011年3月11日で時が止まってしまった場所もあります。復興の状況に伴い、被災された方々の抱える悩みは、ますます多岐にわたり深化しています。

多くの外部支援団体が災害後2～3年目を区切りとして被災地を後にする中、私たちは3年たった今こそ、被災者の方々が自分たちの地域と暮らしの再建に向き合っていくタイミングとして、最も外部からの支えが必要になる時期ではないかと考えます。今年も、気仙沼・岩手・山元各事務所それぞれの地域で、人々に寄り添い、ともに支え合いながら前に進むためのお手伝いをさせていただきます。

被災地の復興はまだ始まったばかり。皆さまからの引き続きの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

緊急救援室室長 木村万里子



ご挨拶	2
目次	3
つながる人の和 復興プロジェクト気仙沼	
気仙沼事務所	
これまでの活動	4
まちづくり支援	6
子ども支援	8
漁業支援	10
これからの活動	12
走れ東北！ 移動図書館プロジェクト	
岩手事務所	
これまでの活動	14
これからの活動	18
山元事務所	
もうひとつの移動図書館 活動拠点	19
シャンティ国際ボランティア会（シャンティ）とは？／	
ロゴについて	22
東日本大震災支援募金 決算報告書	23
活動を支えるスタッフ／募金のお願	24



# つながる人の和 復興プロジェクト気仙沼

これまでの活動

2011年3月～2014年3月

気仙沼事務所 里見 容



階上（はしかみ）地区 宮城県立向洋高校  
震災遺構（群）に指定に向けた取り組みがある（2011年12月）

## 東日本大震災から3年

あの日、東日本大震災が起こってからは、シャンティ国際ボランティア会（以下シャンティと略す）が最初に被災地支援を始めたのは気仙沼でした。国内外での被災地支援の経験があるスタッフを派遣し、混乱の中、全国から駆けつけた多くの人たちと支援にあたりました。それは、日本中が経験したことがない大災害を前に、一体何ができるのか、地域の人たちや地元の職員とともに模索を繰り返す日々が始まりました。

それから3年が経ち、無くなったがれき。工事車両が行き交い、少しずつ進む復旧作業。その一方で、人々の心には、決して消えることのない震災の爪痕が残っています。長期化する仮設住宅での生活は、徐々に人々の心と身体を疲弊させていっています。家族や友人が、あるいは自らも被災者という立場で、努力をしなければならなかったかもしれない故郷や、これまでの暮らしを取り戻すために、向き合っていたいかなければなりません。それでもなお、被災地の人々はこの先を見つめています。19年前の阪神・淡路大震災から神戸が復興するまでに10年以上の歳月がかかったことを知り、改めていまこの地で何をすべきなのか問われています。



避難所になった小泉中学校体育館でのお茶会（2011年6月）



地元の人たちと活動後に（2011年4月）

## 移り行く風景、変わらないもの

震災直後の3月15日から東北沿岸部に調査に入って以降、シャントイの支援活動は気仙沼市災害ボランティアセンターの立ち上げ支援にはじまり、点在する避難所に足を運んで、炊き出しの調整や生活必需品を届けました。震災から数ヶ月が経ち、住民が仮設住宅に移っていくにつれ、避難所も相次ぐように解散。時間じくして、支援団体に求められる活動も、がれきの撤去や生活必需品の提供といった目に見えることばかりではなくなってきました。それは、課題がなくなったというわけではなく、移り行く状況を把握して、より地域や状況ごとに対応していくことが求められてきていたのです。緊急救援活動の段階から、継続してこの地で活動していたからこそ、活動を通じて築いてきた地域の人たちとのつながりの中で、地域に根ざした支援活動を行うことができたのではないかと思います。現在は、まちづくり支援、子ども支援、漁業支援を中心に活動を行っています。

### 実施実績（2011年3月～2012年3月）

学用品の配布（11校：1885人、防災頭巾（16校3幼稚園：2465人）、児童書（6校：1100冊）  
炊き出し（15カ所：57回 / 7068食）  
日帰り温泉ツアー（5避難所：48回 / 980人）  
ボランティア人数（延べ3436人）  
遺父母の会「つむぎの会」（1カ所：32回）  
まちづくり支援実施地域数（4地区）  
学習支援実施日数（3小学校：109日間）



小泉地区での炊き出し（2011年3月）

# まちづくり支援

気仙沼事務所自鳥孝太



「まちづくりワークショップ」(2013年11月:階上地区まちづくり協議会)

## 一緒に悩む

「まちづくりを支援して  
ます」と言う、「何を  
するのですか?」と聞か  
れます。お手伝いをして  
いる地域は複数ですが、  
ほとんどが、震災直  
後の避難所で知り合  
った方々とのご縁で  
つながりました。

2011年夏、避難所の生活を経て、多くの方々が仮設住宅などへ移られました。しかし「この先どうなるだろう・」。「流された家の再建の目処がたたない」など、多くの方々が先行きの見えない状況に不安を抱えています。「シャントさん、何か手伝ってよ!」「話し合いに『はまって』ける」と、声をかけて下さいました。「一緒に悩む」まちづくり支援はそこから始まりました。

登米沢地区と前浜地区の「防災集団移転」では、高台への移転を目指す方々の話し合いに加えて頂きました。宅

地や道路は、どんな設計が良いのか?津波を心配し、移転地の標高が知りたい!宅地に何台の車がとめられるのか?様々な疑問や課題について、話し合いは進みます。建築士や土地造成の専門家の方を招いて、勉強会も行いました。経験の無い私たちにも、一緒に悩み考える事で課題を整理し、話し合いを進める事などのお手伝いをしました。



「ワークショップでの発表」(2013年1月)

「未来予想図」



## ■地域の魅力は？

大谷、小泉、階上地区では、住民による「復興まちづくり計画」を作るお手伝いをしてきました。ワークシヨップや話し合いを繰り返し、住民同士が意見を交わす機会や地域への想いを「語り合う場」を設けました。ワークシヨップや会議で生まれたアイデアを基に地図や計画案（「本吉地域震災復興計画」「階上地区復興まちづくり計画」など）

を作って、実現への足掛かりにする支援も行いました。

大切なのは、地元の良さを発掘することです。地域の「資源」や「宝物」は何だろうか？地元の人だからこそ見落としがちな「地域の魅力」を探すお手伝いを行ってきました。

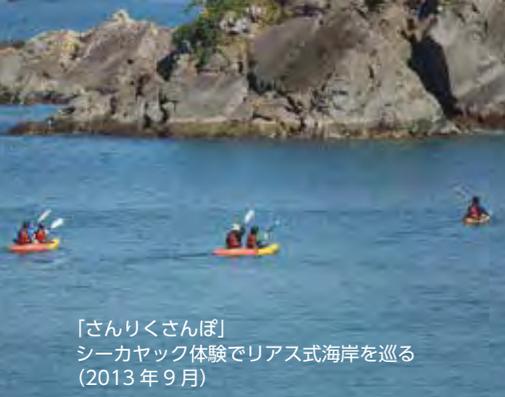
2013年に始めた「さんりくさんぽ」は、地元にある資源（文化や歴史、自然、食文化や工芸など）の再認識を目的とした体験型プログラムです。漁業体験やカヌー、ヨ

ガや写経教室、地元食材の料理教室など15の企画に合計で137人が参加し地域の魅力に触れました。

## ■つくるべきは、人と人の関係

津波で流失した前浜地区の集会所再建は、「住民参加型」の支援活動でした。その中で、私たちは多くのことを学びました。建物の設計から、津波

塩害木の切り出し、製材作業、ウッドデッキづくりなど、地域の方々と一緒に2年間汗を流し、集会所は2013年9月に完成しました。「私たちはコミュニティセンターを作ってるのではないよ！コミュニティそのものをつくっているんだ！」建設委員長の畠山幸治さんの力強い言葉に地域の底力を感じました。



「さんりくさんぽ」シーカヤック体験でリアス式海岸を巡る（2013年9月）



「さんりくさんぽ」メカジキ解体ショーに地元の人々も興味津々！（2013年9月）



「前浜地区コミュニティセンター再建」完成仕上げの大掃除も住民の手で（2013年9月）



「前浜地区コミュニティセンター再建」落成式に集まった多くの支援者と地元の人々（2013年9月）

気仙沼事務所東さやか



「海の宝石」(シーグラス)探し  
(2014年1月: 林の沢海岸)

## 自然に学ぶ

学校の校庭に次々と仮設住宅が建てられました。子どもたちは「遊び場」を失いましたが、被災地の子どもたちには「自由に表現ができる居場所」が特に必要です。

そこで、震災直後から、(特活)日本冒険遊び場づくり協会に協力し、子どもたちの居場所「あそびくぼく」の運営支援を始めました。

長期の休みには、鶴見大学東日本大震災学生ボランティアチームの学習支援「まなびくぼく」を通じて、子どもたちの心のケアの支援も行ってきました。その際、子どもたちが、自由に気持ちを表現して描いた絵をひとつにまとめて「ぶんぶん谷」という一冊の絵本をつくりました。

2013年の夏からは、体験プログラム「あつまれ、浜わらす!」を始めました。こ

の活動は、震災や津波を経験した子どもたちが海に対して「畏敬の念」を持ちながらも、自然が多くの恵みや喜びを与えてくれることを遊びや学びを通して気づき、「海と向き合う」ことを目的としています。夏と冬の合計で8回の「あ

つまれ、浜わらす!」を開催し延べ70人が参加しました。

子どもたちが仲間と共に震災と向き合い、絆を深めながら海との関係を取り戻していくことが、新しい気仙沼の未来につながっていると、私たちは信じています。

## 子どもから大人へ

「あつまれ、浜わらす!」を開催する中で、震災以前から海辺で暮らしていても、海と触れ合っていない方々が多く居ることを知りました。

開催後の保護者へのアンケートからは「プログラム参



大谷小学校の生徒の絵  
(2011年12月)

絵本「ふんぶん谷」が完成  
(2012年4月)

加後、自宅に帰って来た子どもたちが、いつもと違う体験や楽しかったことを嬉しそうに話し、家族の困らんになっている」という声や、参加後の子どもたちの様子に変化があり「娘は、友だちを震災で亡くし、他の家が流されてしまった

せいで、津波で自分が流される夢を見て海を怖がっていましたが、今では海が大好きになりました」という感想がありました。一方で「まだ海には行けない。あの日の事を思い出してしまって・・・子どもの方がしっかりしているの

かな」という親の声もありました。もしかすると、大人の方が子どもたちよりも「海と向き合う」心の準備が出来ていない。または、向き合う「きっかけ」を失ったままで、3年の月日が経過してきたのかもかもしれません。



「あつまれ、浜わらす！」の砂遊び (2013年8月)



「あつまれ、浜わらす！」の鮭網(さけあみ)体験 (2013年12月)

今後は、子どもと大人が一緒に、地域の人々と触れ合いながら共に豊かな自然に学び、震災を乗り越えるきっかけとなる場をつくって行きたいです。

気仙沼事務所 里見容



蔵内之芽組の漁師たち (2013年8月)

## ■ ボランティアの力

2011年の10月以降、シャンティは漁師による養殖わかめの生産者団体、蔵内之芽組くらうちのみぐみの支援を行っています。震災前、漁師たちは、それぞれの家で養殖漁業を営んでいましたが、震災によって船や資材のほとんどが流失。浜で一艘だけ残った船のもと、漁師たちの協働作業が始まりました。震災から3年が経ち、わかめをはじめ、ホタテやホヤの養殖も復旧しつつあります。

震災以降、浜に訪れた多くのボランティアの方たちが地域や漁師たちの助けとなりました。1年目、わかめの再開を後押ししたのは、関東の大学生たちの力でした。自らの子どもと同じくらいの学

生たちが自分たちのために泥だらけになりながら、一生懸命に作業をする姿に、漁師たちは背中を押してもらったと話します。その後もシャンティは、受け入れの窓口となつて、仙台や遠くは関西、九州から訪れる学生や企業、団体の支援をつないできました。

「わかめを美味しいと言われ、自分のことのようにうれしくなった。」と話す漁師の一人。ボランティアに訪れた人たちとの交流がきっかけとなつて、美味しいわかめを届けていきたいと、新たに地元ブランド「こいわかめ」の販売に挑戦しています。昨年は、こうした漁師たちの挑戦を後押ししようとする人たちの協力もあり、関東のいくつかの

お店で、気仙沼産のわかめを



養殖いかだの復旧作業を手伝う学生たち。「あまり力になれているかわからないけど、来てくれるだけでうれしい、と言われるとそれだけで良かったと思う」（2013年9月）



2013年10月に開店した「蔵内 海の駅よりみち」。新メニューづくりに地域の女性たちが集まった（2014年1月）



「三陸気仙沼の求評見本市」に漁師たち自ら「こいわかめ」を出展 / 恵比寿ガーデンプレイス（2013年2月）

## ■地域の交流の場

使ったメニューの提供も始まりました。  
2013年の秋には、蔵内

地区の女性たちによるグループが直売所と飲食店を兼ねたお店「蔵内 海の駅よりみち」を開店しました。地域の女性たちが「地域の交流の場に

なっていければ」、「漁師であるお父さんたちを応援したい」と立ち上がったのです。お店で取り扱う商品は、近くの海で取れるサケや小魚、タ

コ、海草や野菜、手工芸品などが中心。週2日の営業日には地域の人たちが賑わっています。

## これからの活動

気仙沼事務所 白鳥孝太



「まち歩き」をしながら、地域をよく知る人の話を聞く  
(2012年8月：気仙沼子ども大学)

### ■ 地元に残したい、 まちづくりのしくみ

私たちには、忘れてはいけ  
ないことがあります。東日本  
大震災では多くの方々が命を  
落としました。「あの時、いつ  
たい、どうすれば、あの子を  
助けられたのだろう…。」お  
子さんを亡くされたお母さん  
のつぶやきが、耳に残ります。  
気仙沼市では、震災と津波  
で亡くなられた方が1041  
人、未だに行方不明の方は  
236人います。(2014  
年1月14日現在) 震災から3  
年を経て「震災復興計画」を  
基に防災集団移転38地区  
(1100区画)、災害公営住  
宅11地区(1998戸)など  
の復興事業が各所で進んでい  
ます。こうして、国や県など  
行政の復興事業は始動してい  
ますが「住民主体の復興」と  
いう観点では課題があるよう  
に感じます。

被災地でも、地域の防災や  
まちづくり、防潮堤の是非に  
無関心な方も多く、住民が中  
心となった「復興まちづくり」  
が進んでいないのが現状です。  
気仙沼事務所では、活動の  
経験を通じて「場」をつくり「人  
と人をつなぐ」ことが出来る  
人材を地元で育て、シャントイ  
の活動終了時には「まちおこ  
しNPO」など、住民が意欲  
的にまちづくりに参加できる  
仕組みが残ることを最終目標  
に掲げています。



未来を担う子どもたちといっしょに、地域の魅力を  
探して行きたい!

これまで、私たちの活動を支えて頂き、ありがとうございます。

震災と津波をきっかけに「人と海」との関係が、ますますぎこちなくなっています。私たちがこれから目指す「まちづくり」は、人と自然との関わり方を見つめ直し、本来の意味で「豊かなくらし」とは何かを考えることです。この地で、子どもたちが豊かに、そして安心して暮らせるような地域をつくらせていきたいです！

笠原一城

## 地元 スタッフの 意気込み

私たちは、地元で日々暮らしていても「地域の良さ」に、まだまだ気づけていないと感じます。これから、地元の方々と一緒にまちづくり活動をしなが、ひとつひとつ地域の魅力を見つけて、子どもたちや次の世代につなげていきたいと思っています。「自分のふるさとに誇りを持てる地域」にしていきたいです！

高山友美子



「あつまれ、浜わらす！」参加者と「ガッツポーズ」の笠原スタッフ（後列右）、高山スタッフ（後列左）（2014年1月）



人と海との関係考えた「未来のまち」の絵（2013年8月：大谷小学校2年生 佐々木美羽さんの作品）



走れ東北!

移動図書館プロジェクト

## 走れ東北！ 移動図書館プロジェクト

これまでの活動

2011年6月～2014年3月

岩手事務所 三木真冨



津波の被害に遭った陸前高田市立図書館と移動図書館車「はまゆり」号

### なぜ移動図書館か

東日本大震災で図書館や書店が大きな被害を受けました。特に陸前高田市立図書館は建物、蔵書だけではなく、図書館員の方が全員行方不明または死亡という大きな被害を受けました。

「こんな時だから、今、出会う本が子どもたちの一生の支えになる」被災後間もないころある図書館員の方から聞いた言葉です。

今回の大震災によって、本を読む機会を途切れさせてはならないと思い、シャンティは岩手県に調査に入りました。避難所では全国から送られた善意の本が段ボール箱に詰まったまま、隅においてられている姿を幾度となく見ました。

そこで、ただ本を送るのではなく、人の手の入った移動図書館活動することに決めました。活動地は、図書館が大きな被害を受けた、山田町、大槌町、大船渡市、陸前高田市を選びました。

仮設団地に入居されている方々は震災前とは異なる住環境で暮らすことになり、新しいコミュニティの形成が問題視されていました。図書館はただ本を借りる場所ではなく、地域の交流の場としての役割もあることから、移動図書館において集いの機能も持たせることにしました。

## 1 遠野の岩手事務所開設

2011年6月6日沿岸部にアクセスのしやすい岩手県遠野市に事務所を開設しました。書庫となる広いスペースが必要のため、元縫製工場の跡地を借りました。事務所と書庫の整備に全国から沢山のボランティアの方にお越しいただきました。



## 2 運行準備(本の登録・スタッフ採用)

図書館と共に書店も被害を受けたため、全国から本を募り蔵書を揃えました。送られてきた本を選別しバーコードを貼り付けて登録します。また移動図書館の運行スタッフとドライバーを地元から採用しました。



## 3 手作りの図書館車

図書館車の納期が3ヵ月以上かかるため、軽トラックの荷台にカラーボックスを載せた手作りの移動図書館車を作成しました。600-800冊しか本を積みませんが、避難所から仮設団地への引っ越しが進み始めたところで、軽トラ図書館車は威圧感もなく、振り返ってみればとてもよい選択だったと思います。



## 4 初運行！ 滝の里の運行風景

運行初日は2011年7月17日。最初に訪れた仮設団地で、急ごしらえの図書館車に真っ先に気づき、駆け寄ってきてくれたのは子どもたちでした。その日は、市内4ヵ所の仮設団地を回りましたが、途中「図書館待ってました！」との声も。

続いて7月23日に大船渡市で、翌24日に山田町で、そして7月30日に大槌町でと次々に移動図書館活動を始めました。





本式の移動図書館車。1,500冊以上の本が搭載可能で雨の日も活動しやすくなった



タープの下でのお茶のみ風景



図書館の中は子どもたちに大人気

## ●大切にしていること

活動当初、移動図書館で巡回していた仮設団地は13カ所でしたが、各市町の行政と協力しながら現在は25カ所に巡回仮設団地を増やしています。また仮設団地の集会所に文庫を設置、図書室を開くことでさらに活動の幅を広げています。

私たちの図書館は「みんなの居場所」。おしゃべり自由。ご利用者同士またはスタッフと、他愛もないおしゃべりを楽しみ、たくさん笑って帰ってほしいと考えています。図書館車のそばにキャンペーン用のタープを広げ、

## ●本でつながる

その下に折り畳みの机を広げ、机の上にはその日の岩手日報や雑誌を置いて、コーヒーなどの飲み物をお出ししてくつろいでいただきます。「本を読む気にはまだならないな」と、本は借りずにコーヒーを飲んでおしゃべりだけしていられる方も大歓迎です。

借りられた本、リクエストされた本を通じて仮設団地にお住いの方の生活を知ることができます。料理の本は人気がありますが、仮設団地の狭いキッチンでも作れる簡単な料理の本、一人分の料理のレシピ本などが人気があります。

最近の間取りの本など、これから家を建てようとしている方からリクエストを頂きます。

今後どのような資料が求められるのか、おしゃべりや貸し出しを通じて感じとり、選書に役立てています。

## ●図書館でのお楽しみ

私たちの活動は、定期的に仮設団地に訪れて移動図書館活動を行っていることに加え、様々なイベントも行ってきました。大好評だったのが、遠野の語り部さんと呼んだ遠野物語を聞くイベントです。そのほか、地元のおはなし会の読み聞かせ、中学校茶道部によるお茶会、被災した博物館と一緒に移動博物館を実施す



スタッフによる読み聞かせ



陸前高田市に建設したコミュニティー図書室。  
おしゃべり・お茶が飲める空間になっている



図書室で開催した地元保育園の子どもたちの絵画展



陸前高田コミュニティー図書室が併設されている  
オートキャンプ場モピア内の集会所

るなど、仮設団地の方々と一緒に楽しみながら、活動の輪も広がっていきました。

### ●ご利用者との関係

私たちの活動では本の貸し出しだけでなく、ご利用者とおしゃべりを大切にし、声を聞くことを心掛けています。初めはぎこちなかった関係も、活動の回数を重ねるごとに距離が縮まり、会話も弾むようになりました。

常連のご利用者から顔を覚えてもらっていたことを喜ぶスタッフ。ご利用者の顔を思い浮かべながら選書するスタッフ。土地の習わしを教わるスタッフ。私たちの図書館は出会い・交流の場になっています。

話題は、仮設団地での暮らしや町の復興のことなど地元のことを中心です。ご利用者とスタッフの話が他のご利用者に広がり、おしゃべりの輪ができます。「たくさん笑ってすっきりした」「もっと長く話したかった」とお帰りの際に聞く声です。

一方で、辛かった震災の体験や現在の暮らしの辛さなどを、そっとスタッフに打ち明けてくれる方もいます。

ご利用者とのつながりを大切にしながら、今後被災地に寄り添っていきます。

## いわてを走る移動図書館プロジェクト実績

総巡回仮設団地回数 1,178 回  
総利用者数 11,324 人  
総貸出冊数 60,884 冊

文庫設置個所 25 ヶ所  
蔵書 約 50,000 冊

※ 2013 年 12 月末時点

※総利用者数と総貸出冊数は、移動図書館、  
図書室、文庫を含めた実績



「やまだ図書館まつり!」震災後図書館を盛り上げるため山田町立図書館、地元おはなし会、シャンティが協働してイベントを企画した。9日間で1,200名を超える来館者があった



「スタンプラリー“図書館でまってるね”」陸前高田市立図書館とシャンティを含む3つの民間図書館が連携してスタンプラリーを企画した

### これからの活動

震災より3年が経過しましたが、未だに多くの方が仮設団地での生活を余儀なくされています。今後復興が進むにつれ、住まいに関する不安が一層高まることが予想されます。

私たちは不安を抱える被災者の方々に寄り添う図書館の活動を継続します。今後は、復旧しつつある地元行政の図書館、おはなし会、NPOなどと連携しながら地元根付いていく活動を意識的に行っていきたいと考えています。

復興には長い道のりが必要です。岩手事務所が撤退した後も、その土地に必要な図書活動を継続させていくにはどうしたらよいか、地元の方々と一緒に考え、築いていきたいと思えます。

## もうひとつの移動図書館 活動拠点

山元事務所 古賀東彦



図書館車の中は  
子どもたちの居場所

### 東北3県を「本」とともに走る

「いわてを走る移動図書館プロジェクト」（以下「いわてを走る」と略す）の開始から約1年、宮城県、福島県においても図書サービスを通じた支援を行うことが決まりました。福島県との県境近く、宮城県亘理郡山元町にある徳本寺の早坂文明住職がシャントイの常務理事を務めるご縁で、2012年7月、徳本寺の境内地に事務所を開きました。

活動地は、事務所のある山元町、そして山元町から車で1時間ほど行った福島県南相馬市です。「いわてを走る」にならない、それぞれの活動を「みやぎを走る移動図書館プロジェクト」「ふくしまを走る移動図書館プロジェクト」と名付けました。仮設団地において、本を貸し出しながら利用者とのふれあいを大切にすることに始まり、運行スタイル、蔵書・利用者登録、スタッフのエプロン姿まで、「いわてを走る」を参考にしています。

図書館車は、「いわてを走る」のために大阪府の枚方市から寄贈された図書館車を山元事務所に移送。さらに、凸版印刷が仙台で行っていた被災地支援活動「ブックワゴン」で使われていた図書館車を譲り受け、合計2台で運行しています。

## ●山元町での活動

山元町では、東日本大震災により六百数十人の方が亡くなりました。人口に占める死者の割合では、県内では女川町、南三陸町に次ぐ大きな被害を受けました。基幹路線のJR常磐線が寸断されたため、車を運転しない方の生活は大変です。暮らしやすい場所を求めて人口流出も続いています。

山元事務所は、山元町社会福祉協議会・やまもと復興応援センターより後援を受け、宮城県図書館のご協力もあり、2012年9月より、町内にある全ての仮設団地を移動図書館車で定期的に訪問しています。顔の見える活動を大切にし、山元町を中心に地元スタッフで固めています。移動図書館車のドライバーは町でも顔が広く、運行先ではドライバーを中心に話の輪が広がることも珍しくありません。また、ブックオフグループのボランティアが定期的に運行サポートに訪れてくれるのも、山元町での活動の特徴です。

仮設団地にもだいぶ空き室が目立つようになってきました。これから先、仮設住宅暮らしに孤独を感じる方がさらに増えるものと思われれます。

そのような方たちがほっとできる場づくりを少しでもできればと考えています。

## ●南相馬市での活動

2012年10月には、南相馬市でも移動図書館の運行を開始。南相馬市社会福祉協議会、同市教育委員会、福島県立図書館などのご理解があつて、活動を実現できました。現在、鹿島区の仮設団地8か所を定期的に訪問しています。

訪問先には、原発事故で警戒区域に指定されていた市内小高区から避難されている方が大勢暮らしています。家は残っているが、帰りたくても帰れない苦しみをよく聞きます。津波被害により仮設住宅暮らしを強いられている方たちもいらつしやいます。

復興までの道のりは長く、また震災への意識の風化が懸念されるこの頃、どのタイミングでも始めるべき支援があると考えます。2014年より、鹿島区と小高区の間位置する、原町区の仮設団地への訪問も始まります。原町区内に拠点も確保しました。

だれかが返しに來られた本は、次にだれかが借りる一冊となります。子どもたちの「また来てね」の声にもしっかりと応えたい。どのようなつながりが、どのような場づくりが求められているのか、訪れる先の方たちと一緒に考えていきたいと思います。



南相馬市の公園にじゃぶじゃぶ池をつくる計画に協力

山元町にて。2月には珍しい雪の中を大勢のご利用者が本を借りに



南相馬市にて。エプロン姿のスタッフと割烹着姿のおかあさんたちで話が弾む

## ■ シャンティ国際ボランティア会 (シャンティ) とは？

シャンティは 1981 年に設立された国内有数の国際協力 NGO です。

現在、東京事務所を中心に、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタン、ミャンマーに海外事務所を置いています。2013 年も 5 万冊の絵本（累計 86 万冊）を海外の子どもたちへ届け、15 棟の小学校舎（累計 330 棟）を建設しました。また、阪神・淡路大震災以降、国内外 20 を超える災害救援を行い、東日本大震災では、宮城県気仙沼市と岩手県釜石市、宮城県亶理郡山元町に現地事務所を開設して、長期的な支援活動を行っています。

## ■ ロゴについて

### 「つながる人の和 復興プロジェクト気仙沼」

人と人がつながり、人というピースがパズルのようにつながり、また新たに出会っていくことで、共に復興をめざしていくイメージです。それぞれの色は、青は気仙沼の海、緑は自然、赤は復興への情熱や人への思いやり、黄色は、希望を表しています。



HP <http://sva.or.jp/kesenuma/>  
facebook <http://www.facebook.com/SVA.Kesenuma>  
twitter [http://twitter.com/sva\\_kesenuma](http://twitter.com/sva_kesenuma)

### 「走れ東北！移動図書館プロジェクト」

本を読むといろんな顔になります。わくわくしたり、ちょっとびっくりしたり、ほっとしたり、そしてやっぱりにっこり笑顔！いろんな顔に会いたくて、本を積んだ仲間たちが今日も走ります。そんな思いがこもったロゴマークです。



HP <http://sva.or.jp/tohoku/>  
facebook (いわて) <http://www.facebook.com/SVA.Mobile.Library.for.Iwate>  
(みやぎ) <http://www.facebook.com/miyagiwohashiru>  
(ふくしま) <http://www.facebook.com/fukushimawohashiru>  
twitter [http://twitter.com/mobile\\_library](http://twitter.com/mobile_library)

# 東日本大震災支援募金 決算報告書

(2013年1月1日～12月31日)

## 【収益】

項目	金額
指定正味財産からの受取寄付金振替額	103,343,414
指定正味財産からの受取補助金振替額	14,145,528
固定資産受贈益	10,000,000
収益合計	127,488,942

\* 東日本大震災支援寄付金はすべて一旦、指定正味財産の受取寄付金 / 受取補助金として計上した後、費用に応じて収益に振替えています。

## 【費用】

項目	金額
復興支援費（気仙沼事業）	44,781,333
復興支援費（岩手事業）	41,715,923
復興支援費（山元事業）	21,296,683
共通費用	19,695,003
費用合計	127,488,942

## 【2013年度募金・補助金】

項目	金額
東日本大震災・無指定募金	22,765,558
気仙沼事業指定募金	25,445,893
岩手事業指定募金	11,671,897
山元事業指定募金	15,803,735
ジャパンプラットホームからの補助金 (岩手、山元)	37,576,852
岩手県教育委員会からの補助金（岩手）	1,665,528
合計	114,929,463

【東日本大震災支援寄附金預金残高】 202,386,713

## 活動を支えるスタッフ

シャンティは気仙沼、岩手、山元の3カ所に現地事務所を設置して、地元採用のスタッフを中心に活動しています。

### 気仙沼事務所



後列左より  
武田祐樹、白鳥孝太  
(事務所統括責任者)、  
須賀良央  
前列左より  
東さやか、笠原一城、  
畠山友美子、青島寿宗、  
里見容

### 山元事務所



後列左より  
古賀東彦(所長 岩  
手事務所と兼任)、  
今村貞行、岩崎敏、  
齋藤敏明  
前列左より  
鈴木清子、高橋あすか、  
金沢幸枝、太田和代

### 岩手事務所



岩手事務所

左より  
千葉りか、吉田晃子、三木真牙



陸前高田コミュニティー図書室

左より  
津田千亜季、村上悠



かねざわ図書室

左より  
似田貝淳、村中一欽、佐藤友貴、黒澤  
智美

## 募金のお願い

被災地の復興は中長期的な活動となります。引き続きのご支援をお願いいたします。

#### ●郵便振替での募金

郵便振替 00170-8-397994  
加入者名 SVA 緊急救援募金

#### ●クレジットカードでの募金

<http://sva.or.jp/donate-t/>

※税制優遇について

この募金は税制上の優遇も受けられます。送られてきた募金の領収書を保存しておいてください。他の控除と同様に、確定申告の際に申請することになります。



公益社団法人  
シャンティ国際ボランティア会  
私たちは向き合います。苦難の中にある人々と世界に。

〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階  
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220  
HP <http://www.sva.or.jp/> E-Mail [eru@sva.or.jp](mailto:eru@sva.or.jp)

この会報の製作費から、500円が  
東日本大震災の復興・支援の費用になります。

この報告書はFSC® 森林認証紙、ノンVOCインキ(石油系溶剤0%)など印刷資材と製造工程が環境に配慮されているグリーンプリンティング認定工場で印刷しています。また、読みやすさに配慮した書体が使用されています。

